「過疎山間地域における高齢者支援ネットワークの現状と課題」

―Ａ町高齢者支援組織交流会の分析から―

郷　洋子[1)]　村松照美[1)]　流石ゆり子[2)]　小山尚美[2)]　河野由乃[2)]　林正健二[3)]
小野興子[4)]　横山貴美子[4)]　伊藤健次[4)]　城戸裕子[4)]　波木井　昇[5)]

要　旨

過疎山間地域におけるひとり暮らし・夫婦世帯高齢者に焦点を当てて高齢者支援ネットワークの現状と課題を明らかにすることを目的に、高齢者支援住民組織代表、高齢者支援団体および行政担当職員の計14名を対象とした『Ａ町高齢者支援組織交流会』実施記録の逐語録を質的に分析した。その結果、過疎山間地域の地区特性と高齢者支援ネットワークの現状として12カテゴリ、高齢者支援ネットワークの課題として、【住み慣れた場所で最期を迎えることの実現】【交流の場の提供】【地域住民としての些細な支援】【行政の役割】【地域特性を考慮した支援ネットワークづくり】の５カテゴリが抽出された。高齢者支援の最終的な目標である【住み慣れた場所で最期を迎えることの実現】の為に【地域特性を考慮した支援ネットワークづくり】が重要であり、〈その人にあわせたネットワークづくり〉と〈地域の現状にあわせたシステムづくり〉の必要性が示唆された。

キーワード：過疎山間地域、高齢者、ひとり暮らし世帯、夫婦世帯、支援ネットワーク

Ⅰ．はじめに

わが国の高齢化率は平成18年10月１日現在20.8%であり[1)]、年々上昇している。また65歳以上の者のいる世帯に占める単独世帯の割合は22.4%、共に65歳以上の夫婦のみの世帯は22.5%であり[2)]、どちらも年々増加している。佐々木ら[3) 4)]によると、ひとり暮らしまたは高齢者のみで暮らしている高齢者の８割前後が「今の生活を継続したい」思いをもっていたが、１年半後には17%の者が健康状況などの変化により、独居または高齢者のみで生活を送ることが困難になり、入院や子ども世帯との同居など暮らしを変化させていた。このようにひとり暮らしや高齢者のみの世帯は、些細なことが契機となり要介護状態となりやすい対象であり、介護保険法の改正においてサービス体系の見直しや地域における総合的・包括的マネジメント体制の整備が打ち出されている[5)]。しかしこれらの高齢者が住み慣れた地域で最期までその人らしく過ごすための具体的な支援についてはまだまだ検討が必要であり大きな課題である。

高齢者、特にひとり暮らしや夫婦世帯の高齢者が住み慣れた地域で最期までその人らしく過ごすためには、高齢者と近隣住民との関わりが不可欠であると考える。しかし地域における高齢者と隣近所との関係をみるとその結びつきは年々弱まっており[6)]、現代は人々の移動性・流動性の高まりや個人主義的傾向の強まりなどを背景に「ご近所」の人間関係が形成されにくく、地域社会の支え合う関係が脆弱化している[7)]。こ

（所　　属）	（専攻分野）
1）山梨県立大学看護学部	地域看護学
2）山梨県立大学看護学部	老年看護学
3）山梨県立大学看護学部	看護関連科学
4）山梨県立大学人間福祉学部	福祉コミュニティ学科
5）山梨県立大学国際政策学部	総合政策学科

の傾向は都市部において著しいが、過疎化が進む山間地域においても例外ではなく、若年層を中心とした人口流出により地域社会の構成員が減少する[8]ことにより、地域での相互の支え合いが低下している状況がある。また65歳以上の高齢者の割合が5割を越え共同体の運営ができなくなった集落を「限界集落」といい、山間地域において過疎に伴う問題となっているが、建物の老朽化と住民の高齢化を抱え全室の半分以上が空き室になるいわゆる「ゴーストマンション」という言葉に代表されるような状況が都市部においても見られており[9]、過疎の問題は山間地域・都市部に共通の課題である。地域社会のこのような変化や現状において、地域住民のつながりを再構築し支え合う体制づくり、地域における支え合うネットワークづくりの必要性が指摘されている[10]。高齢者が住み慣れた地域で最期までその人らしく過ごすことの実現のためには、地域における支援ネットワークを住民と共に構築することが不可欠である。また都市部と山間地域では、公共交通機関の発達の程度や様々な場所への地理的なアクセスの良さ、民間を含めた様々な高齢者向けサービスの種類の豊富さなどが異なっていると考えられる。従ってその地域の特性を考慮した支援ネットワークを構築することが求められる。

地域における住民主体の高齢者支援ネットワークづくりの取り組みは、都市部である東京都調布市の地域包括支援センターを中心とした実践例[11]、住民同士の繋がりが強く残っている大分県竹田市の健康づくり組織活動の実践例[12]等が見られるが、急速に高齢化過疎化が進む山間地での高齢者支援ネットワークづくりの取り組みやその課題を明らかにした研究は少ない[13]。山間地の地域特性を踏まえたネットワークづくりは緊急の課題である。今回、過疎山間地という特徴をもつA町に暮らすひとり暮らし・夫婦世帯高齢者に焦点をあてて支援ネットワークの現状と課題を明らかにすることにより、過疎山間地における住民と共につくる地域特性にあわせた高齢者支援ネットワークの構築に向けた示唆が得られると考え本研究に取り組んだので報告する。

Ⅱ．研究目的

ひとり暮らし・夫婦世帯高齢者に焦点をあてて、過疎山間地域における高齢者支援ネットワークの現状と課題を明らかにする。

Ⅲ．用語の定義

本研究においてネットワークとは、能力の提供や情報の交換など、特定の目的遂行のために活用できる、個々人または組織の繋がり[14]とする。また、支援ネットワークとは、他者を支え助けるという目的遂行のために活用できる個々人または組織の繋がりとする。

Ⅳ．研究方法

1．研究対象

対象地域であるA町はB県の南西部の県境に位置し総面積約370㎢の広大な区域を有し、町の北半分は国立公園および県立公園に属しており、標高差約2,960mを有する急峻な山岳地帯である。人口は平成3年2,406人、平成13年1,797人、平成19年1,535人（各年4月1日現在）と減少しており過疎化が進んでいる。平成19年の65歳以上の高齢者人口は741人、高齢化率は48.3%とB県内トップであり、高齢化も進んでいる。また平成18年の高齢者人口（768人）に占めるひとり暮らし高齢者の割合は30.5%（234人）、高齢者夫婦世帯の割合は37.8%（145世帯）であり、高齢者に占めるひとり暮らしと高齢者夫婦世帯の割合は約68%と半数以上である。[15] [16] [17]

対象者は研究協力の同意が得られ『A町高齢者支援組織交流会』（以下『交流会』）に参加したA町高齢者支援住民組織代表、高齢者支援団体および行政担当職員の計14名であった。具体的には、地域住民から選抜された健康に関する活動を中心とした住民組織である愛育会、食生活改善推進員会、民生委員、老人保健施設および病院、居宅介護支援事業者、社会福祉協

議会、A町役場福祉保健課であった。A町では毎月定例で地域包括支援センター主催のサービス調整会議が開催されており、その開催に合わせてサービス調整会議終了後に同会議のメンバーに加え本研究メンバー8名が参加し、『交流会』を平成19年12月に実施した。

『交流会』は『住み慣れた町で安心して暮らせるための地域支援ネットワーク～ひとり暮らし・高齢者夫婦世帯に焦点をあてて～』をテーマにA町における高齢者支援の現状と課題を明らかにすることを目的として開催した。『交流会』は1時間30分で行い、内容は、A町の概況説明、本研究メンバーがA町のひとり暮らし・夫婦世帯高齢者から聞き取った内容をもとに『ひとり暮らし・夫婦世帯高齢者の現状および今後の生活に対する思い』として資料化し話題提供し、ディスカッションの導入とした。『交流会』の目的を確認した後、『～わたくし達になにができるか～』をテーマに司会者が投げかけを行い、発言者に偏りがなく自由に活発に意見が出せるよう配慮すると共に、それぞれの発言が繋がるように進めた。ディスカッションは対象者14名と司会の本研究メンバー1名の計15名の中で行われ、時間は約1時間であった。ディスカッションの1時間はその殆どが対象者の自主的な発言となり、各々が偏ることなくそれぞれの立場を踏まえた意見が述べられた。

2. データ収集方法

『交流会』の状況を参加者の同意を得た上でテープに録音し、逐語録に起こし分析データとした。

3. 分析方法

逐語録を何度も熟読し、過疎山間地域の地区特性と高齢者支援ネットワークの現状と課題を表現している記述部分を抽出しデータとした。個々のデータはその意味を比較し関係性を捉えながらまとめ、サブカテゴリ、カテゴリ化し分析した。分析については共同研究者間で協議し、妥当性を高めた。

4. 倫理的配慮

地域包括支援センター長に研究の趣旨を文書と口頭で説明し、研究への承諾を得た。その上で対象者には事前に文書と口頭で、研究の趣旨・方法について説明した。また、研究への参加は自由意思であり協力しなくても何の不利益も被らないこと、途中中断も可能であること、得られたデータは本研究以外では使用しないこと、個人が特定されないよう匿名性を確保すること、データの保管に細心の注意を払い研究終了後は速やかに破棄すること等を説明し、文書にて同意を得た。また得られたデータは分析後破棄するなど、個人情報の管理に留意した。

V. 結果

結果は、『過疎山間地域の地区特性と高齢者支援ネットワークの現状』と『過疎山間地域における高齢者支援ネットワークの課題』の2つにまとめられた。カテゴリは【　】、サブカテゴリは〈　〉、得られたデータは「　」として表し、以下に結果を示した。

1. 過疎山間地域の地区特性と高齢者支援ネットワークの現状（表1）

57データから34サブカテゴリ、そして【過疎化が進んでいる】【高齢者は生活に対するマイナスの感情を抱くことがある】【高齢者は“ここに生き、住み続けたい”と思っている】【高齢者は周りの手助けがあれば独居維持が可能である】【家族が高齢者の意に反して連れて行く】【様々な住民が集う場がある】【支援者は“住民が集う意味”を感じている】【ここにはコミュニティが存在する】【様々な背景をもつ高齢者には共同生活への課題がある】【民間団体の支援だけでは限界がある】【行政の支援だけでは限界がある】【住民同士の支え合いの限界がある】の12カテゴリが抽出された。

「住民の数がどんどん減っており、受診者の数も一時期よりずいぶん少なくなってきてい

表１　過疎山間地域の地区特性と高齢者支援ネットワークの現状

カテゴリ	サブカテゴリ	データ
過疎化が進んでいる	住民数の減少	住民の数がどんどん減っており、受診者の数も一時期よりずいぶん少なくなってきている
	地区の点在	この町では部落が点在しており、そこに老人が生活している
	高齢者だけの地区での限界がある	平均年齢が70後半みたいな地域では、"声をかけてもらえれば"といってもそれができない場合もある
高齢者は生活に対するマイナスの感情を抱くことがある	高齢者は寂しい思いをもっている	高齢者が寂しい気持ちを抱いていることを感じる
	つきあいによる金銭の負担を感じている	昔気質の人は"頂いたら返さなければ"という気持ちがあり、それが金銭的にも負担となることもある
	高齢者間の考え方の違いにより意欲がなくなる	殆どの70代はとても元気であり、それを老人として認めると、80.90の人達がやる気がなくなる
	トラブルに巻き込まれないか心配	世相激しく物騒になったため、夜の戸締まりなどを何度も確認するようになった
高齢者は"ここに生き、住み続けたい"と思っている	高齢者は"自分の家がよい"と言っている	訪問先の利用者は、やっぱり自分の家が良いと言っている
		自分の家が一番良いという高齢者の声を多く耳にする
	高齢者は"ここに生き、ここに住み続けたい"と思っている	高齢者を見ていて、ここへ住み続けたいという気持ちがあるのがよく分かる
		共同生活のために少人数の集落に他集落へ来て共同生活をしてはどうかと打診したが、"私達はここに生きここで住みたい、ここでずっと生活する"という反応であった
	高齢者は"地域を守りたい"思いがある	高齢者には、"自分の地域を守っていく""大事にしたい"という思いがあるように感じる
高齢者は周りの手助けがあれば独居維持が可能である	生活の僅かな支援で独居継続の可能性がある	独居老人を見ていると、少しの手助けがあればこの先も在宅生活を継続出来そうな人がいる
	支援者がいれば退院後元の生活に戻れる	病院から退院し地域に戻れるかどうかは、同居家族や介護者がいるかどうかによる
	高齢者が独居を継続できるのは近隣の支援のおかげと家族が理解している	この町の人達は近所の人達に頭を下げながら、"うちのおかあちゃんいられるのはみんなのおかげだよ"と言っており、このような人達は幸せに生活できていると思う
家族が高齢者の意に反して連れて行く	別居の家族が高齢者を連れて行ってしまう	独居の高齢者を別居の家族が自分たちの所へ連れて行ってしまう
		ある程度の年齢になり、足腰が弱くなると子供の所に連れて行かれることがある
		別居の家族が自分たちのところに連れて行くという話になれば、それ以上踏み込むことはできない
	独居が困難になった時の高齢者と家族の思いが異なっている	独居でいるかいられないかの瀬戸際となった時、子供の方は自分の所へ連れて行きたいが高齢者の方にその意思がない場合が問題である
様々な住民が集う場がある	住民自らの茶話会がある	自分の部落でも月の一日のお題目では、70代、80代の人達が多い時は16.7人集まりその後に茶話会なども行っている
		以前は週に1回、男の人で85人ぐらいの人数で集まり、時にはお酒を飲みながらいろいろ話をしたり相談したりする場があった
	保健師の保健指導の場に住民が集う	月1回の健康相談を違う地区同士でお互い協力しあって開催している
		健康教育、血圧測定、健康相談の後、お茶のみ会を行った
	組織の活動場面に住民が集う	食生活改善推進員は習ってきた料理、健康、病気、症状について伝達講習として各集落に伝えていくことを保健師の協力を得ながら行っている
		食生活改善推進員では男性の料理教室を実施した
	行政の声かけで住民の集う場をつくる	行政としては現在7集落でサロン教室を開催している
	地域の行事に住民が集う	私も努めて、そのお題目へは参加している
		近所との付き合いという理由もあって参加している面もある
支援者は"住民が集う意味"を感じている	皆で集まって話をすることが楽しみ	高齢者にとっては、お茶のみ会がとても楽しみとなっている様子
		昔話をしたり悩みを話したりしていて、なかなか解散とならなかった
	地域での集まりが健康に繋がっている	地域での集まりが本当に健康につながっていることを感じた
ここにはコミュニティが存在する	近隣との繋がりがある	この町は近隣のつながりがある
		"地域のコミュニティ"という言葉を聞くが、まだここにはそういうものが存在するのだと思う
	一住民として高齢者の生活を支える	一住人として近隣の高齢者が困っているのを助けたりした
		直せる範囲のことだったら電気の場合は近所の○○電力を退職した方に、水道の場合は水道組合の組合長に、あるいは区長さんに連絡とって対応してもらい、難しい場合はいつも依頼している業者に連絡をとって来てもらったりしている
		みんなで助け合ってみていければ、アルツハイマーの方もここでの生活を続けられたという事例をこの場で伝えたい
	近隣住民が"役に立ちたい"という思いをもっている	近隣住民は"役に立ちたい"といつでも思っている
		自分は若い方なので私達に何でも言ってくれればいいなといつも思っているが、この思いを自分達が高齢者に伝えていかなければいけないとも思う
		現在では、あの時のおばあちゃんは大丈夫かなという風に高齢者支援を考えられる
様々な背景をもつ高齢者には共同生活への課題がある	共同生活に対し高齢者は個別性がある	高齢者といっても共同生活に適応できる人と、なかなか生活を変えることができない人もいる
		高齢者の中でも年齢差があり、すぐに共同生活に馴染めない場合もある
	共同生活を実施しているところもある	大きな集落では高齢者が自分の生活リズムのなかで自由に共同生活の場に行き、特に決められたメニューをするわけではなくその場の生活を行うということを実施しているところもある
	共同生活を実施するには問題もある	共同生活を望んでいる人がどの程度いるのかということで話が中断していた
		実施段階になると空き家の問題や責任者・まとめ役などの問題が生じ、現段階では足踏み状態になっていると思う
		空き家があっても週末は帰ってくるという様な場合は、共同生活の場として借りることは困難である
		高齢者が集合するためには送迎は必要となるし、この役割をボランティアでやるか業者にするかということが、一番問題になる
民間団体の支援だけでは限界がある	民間団体による支援がある	町内に出張診療所をいくつか展開している
		制度上の工夫をしながらその人の生活を支えたい思いで支援した
	民間団体は家族の代わりはできない	自分達（民間）にできることを考えた時、家族の代わりはできない
		やっぱり最後の所はですね、（民間は）やっぱり家族の代わりはできないと感じる
		最期まで在宅でという話になると往診や訪問看護・ホームヘルパーを入れても、結局子供達としてはどこまで専門職ができるのか、どこまで責任を持てるのかという話になりなかなか難しいと感じた
行政の支援だけでは限界がある	行政の条件付の見守りがある	今現在声かけ運動員が77名いるが、何かあったら声をかけてもらえればとか、例えば何にもなくても2日に1回見守るというような活動もある
	生活を補うための制度を利用する者が少ない	成年後見制度を利用している人は、時間とお金もかかるため本当にわずかしかいない
	行政が24時間生活支援することは難しい	生活の面での困ったことを明確にサービスとして行政が行うのは、24時間職員がいるわけではないので難しい
住民同士の支え合いの限界がある	住民の負担・責任が大きい	高齢者の世話を担う人、一人あたりの負担も大きくなる
		住民だけではやりきれない部分がある
		実際には近隣住民にかかる責任の大きさも感じている

る」から〈住民数の減少〉、「この町では部落が点在しており、そこに老人が生活している」から〈地区の点在〉、「平均年齢が70後半みたいな地域では、“声をかけてもらえれば”といってもそれができない場合もある」から〈高齢者だけの地区での限界がある〉のサブカテゴリが得られた。これら3つのサブカテゴリから【過疎化が進んでいる】のカテゴリを抽出した。

「高齢者が寂しい気持ちを抱いていることを感じる」から〈高齢者は寂しい思いをもっている〉、「昔気質の人は“頂いたら返さなければ”という気持ちがあり、それが金銭的にも負担となることもある」から〈つきあいによる金銭の負担を感じている〉、「殆どの70代はとても元気であり、それを老人として認めると、80,90の人達がやる気がなくなる」から〈高齢者間の考え方の違いにより意欲がなくなる〉、「世相激しく物騒になったため、夜の戸締まりなどを何度も確認するようになった」から〈トラブルに巻き込まれないか心配〉のサブカテゴリが得られた。これら4つのサブカテゴリから【高齢者は生活に対するマイナスの感情を抱くことがある】のカテゴリを抽出した。

「訪問先の利用者は、やっぱり自分の家が良いと言っている」「自分の家が一番良いという高齢者の声を多く耳にする」から〈高齢者は“自分の家がよい”と言っている〉、「高齢者を見ていて、ここへ住み続けたいという気持ちがあるのがよく分かる」「共同生活のために少人数の集落に他集落へ来て共同生活をしてはどうかと打診したが、“私達はここに生きここで住みたい、ここでずっと生活する”という反応であった」から〈高齢者は“ここに生き、ここに住み続けたい”と思っている〉のサブカテゴリを抽出した。また「高齢者には“自分の地域を守っていく”“大事にしたい”という思いがあるように感じる」から〈高齢者は“地域を守りたい”思いがある〉のサブカテゴリが得られた。これら3つのサブカテゴリから【高齢者は“ここに生き、住み続けたい”と思っている】のカテゴリを抽出した。

「独居老人を見ていると、少しの手助けがあればこの先も在宅生活を継続出来そうな人がいる」から〈生活の僅かな支援で独居継続の可能性がある〉、「病院から退院し地域に戻れるかどうかは、同居家族や介護者がいるかどうかによる」から〈支援者がいれば退院後元の生活に戻れる〉、「この町の人達は近所の人達に頭を下げながら、“うちのおかあちゃんいられるのはみんなのおかげだよ”と言っており、このような人達は幸せに生活できていると思う」から〈高齢者が独居を継続できるのは近隣の支援のおかげと家族が理解している〉のサブカテゴリが得られた。これら3つのサブカテゴリから【高齢者は周りの手助けがあれば独居維持が可能である】のカテゴリを抽出した。

「独居の高齢者を別居の家族が自分たちの所へ連れて行ってしまう」「ある程度の年齢になり、足腰が弱くなると子供の所に連れて行かれることがある」等から〈別居の家族が高齢者を連れて行ってしまう〉、「独居でいられるかいられないかの瀬戸際となった時、子供の方は自分の所へ連れて行きたいが高齢者の方にその意思がない場合が問題である」から〈独居が困難になった時の高齢者と家族の思いが異なっている〉のサブカテゴリが得られた。これら2つのサブカテゴリから【家族が高齢者の意に反して連れて行く】のカテゴリを抽出した。

「自分の部落でも月の一日のお題目では、70代、80代の人達が多い時は16，7人集まりその後に茶話会なども行っている」等から〈住民自らの茶話会がある〉、「健康教育、血圧測定、健康相談の後、お茶のみ会を行った」等から〈保健師の保健指導の場に住民が集う〉のサブカテゴリを抽出した。また「食生活改善推進員では男性の料理教室を実施した」等から〈組織の活動場面に住民が集う〉のサブカテゴリを抽出した。「行政としては現在7集落でサロン教室を開催している」から〈行政の声かけで住民の集う場をつくる〉のサブカテゴリが得られ、「私も努めて、そのお題目へは参加している」等から〈地域の行事に住民が集う〉のサブカテゴ

リを抽出した。これら5つのサブカテゴリから【様々な住民が集う場がある】のカテゴリを抽出した。

「高齢者にとっては、お茶のみ会がとても楽しみとなっている様子」等から〈皆で集まって話をすることが楽しみ〉のサブカテゴリを抽出し、「地域での集まりが本当に健康につながっていることを感じた」から〈地域での集まりが健康に繋がっている〉のサブカテゴリが得られた。これら2つのサブカテゴリから【支援者は“住民が集う意味”を感じている】のカテゴリを抽出した。

「この町は近隣のつながりがある」等から〈近隣との繋がりがある〉のサブカテゴリを抽出し、「一住人として近隣の高齢者が困っているのを助けたりした」「みんなで助け合ってみていければ、アルツハイマーの方もここでの生活を続けられたという事例をこの場で伝えたい」等から〈一住民として高齢者の生活を支える〉のサブカテゴリを抽出した。また「近隣住民は“役に立ちたい”といつでも思っている」等から〈近隣住民が“役に立ちたい”という思いをもっている〉のサブカテゴリを抽出した。これら3つのサブカテゴリから【ここにはコミュニティが存在する】のカテゴリを抽出した。

「高齢者といっても共同生活に適応できる人と、なかなか生活を変えることができない人もいる」等から〈共同生活に対し高齢者は個別性がある〉のサブカテゴリを抽出した。また「大きな集落では高齢者が自分の生活リズムの中で自由に共同生活の場に行き、特に決められたメニューをするわけではなくその場の生活を行うということを実施しているところもある」から〈共同生活を実施しているところもある〉のサブカテゴリが得られた。「共同生活を望んでいる人がどの程度いるのかということで話が中断していた」「実施段階になると空き家の問題や責任者・まとめ役などの問題が生じ、現段階では足踏み状態になっていると思う」等から〈共同生活を実施するには問題もある〉のサブカテゴリを抽出した。これら3つのサブカテゴリから【様々な背景をもつ高齢者には共同生活への課題がある】のカテゴリを抽出した。

「町内に出張診療所をいくつか展開している」「制度上の工夫をしながらその人の生活を支えたい思いで支援した」から〈民間団体による支援がある〉、また「自分達（民間）にできることを考えた時、家族の代わりはできない」等から〈民間団体は家族の代わりはできない〉のサブカテゴリを抽出した。これら2つのサブカテゴリから【民間団体の支援だけでは限界がある】のカテゴリを抽出した。

「今現在声かけ運動員が77名いるが、何かあったら声をかけてもらえればとか、例えば何もなくても2日に1回見守るというような活動もある」から〈行政の条件付の見守りがある〉、「成年後見制度を利用している人は、時間とお金もかかるため本当にわずかしかいない」から〈生活を補うための制度を利用する者が少ない〉、「生活の面での困ったことを明確にサービスとして行政が行うのは、24時間職員がいるわけではないので難しい」から〈行政が24時間生活支援することは難しい〉のサブカテゴリが得られた。これら3つのサブカテゴリから【行政の支援だけでは限界がある】のカテゴリを抽出した。

「高齢者の世話を担う人、一人あたりの負担も大きくなる」「実際には近隣住民にかかる責任の大きさも感じている」等から〈住民の責任・負担が大きい〉のサブカテゴリが抽出され、【住民同士の支え合いの限界がある】のカテゴリが得られた。

2. 過疎山間地域における高齢者支援ネットワークの課題（表2）

22データから11サブカテゴリ、そして【住み慣れた場所で最期を迎えることの実現】【交流の場の提供】【地域住民としての些細な支援】【行政の役割】【地域特性を考慮した支援ネットワークづくり】の5カテゴリが抽出された。

「住み慣れた土地に最期まで住めるよう、この方面でも保健師とも協力して食生活改善推進

表２　過疎山間地域における高齢者支援ネットワークの課題

カテゴリ	サブカテゴリ	データ
住み慣れた場所で最期を迎えることの実現	住み慣れた場所で最期を迎えることを可能にする	住み慣れた土地に最期まで住めるよう、この方面でも保健師とも協力して食生活改善推進員の活動を進めていきたい
		地域の協力のもと、住み慣れた場所で最期を迎えられるという成功例があれば、住民にも自分も同様の最期を送れるのではないかという気持ちになってもらえると思う
交流の場の提供	人々の集まる場をつくる・増やす	“集まる場所を提供する”という感じなら受け入れられると思う
		もっとサロン教室を増やしながら、交流の場または話し合いの場を多く持っていけるかもしれない
		また来年になったらこのような活動（人々の集まる場）をやって、子どもや高齢者の環境を考えていきたいと思っている
		外に出歩かないと会話が本当に単純化されるので、その辺をうまく解決できる方法があればと常に感じている
	共同生活の場の確保	高齢になって共同で生活していく場面があればと思う
地域住民としての些細な支援	隣近所のちょっとした手助け・声かけ	町全体ではなく地区の問題として、地区で隣近所の方がちょっとお世話するというのが本当に必要ではないかと思う
		もうちょっと誰かが入り込んで手助けしてあげれば、高齢者は助かるのかなと思う
		隣近所の声掛けがあったら独居生活が可能となるのではないか
	モデル事業化（誰もがヘルパー）への取り組み	モデル事業として“日中は誰もかれもがみんなヘルパーさん”というような取り組みをしていただけたら嬉しく思う
		モデル事業として社会福祉協議会に全面的に取り組んでいってもらいたいと思う
		是非モデル事業などの発信をこの町からしていただきたいと思う
	一住民としての支援	地域住民として、支援していくことは可能と考える
		私達の年代の人達はいつでも頼ってもらえるような人間になる必要がある
		小さい頃からお互いに助けていくという意識があれば良いのではないか
行政の役割	集落再建	行政としても、集落再建、合併・合流というようなことも避けられないのではないか
	住民への周知	一住民としての高齢者への支援を地域住民に周知することは行政の役割となる
	支援不足の補い	住民だけでできなければ行政の出番が来るというようになっていけば良いのではないか
地域特性を考慮した支援ネットワークづくり	その人にあわせたネットワークづくり	地域での支援ではどれだけ一人の人に大勢の方が関われるかというところが、最終的には重要になると思う
	地域の現状にあわせたシステムづくり	声をかけてもらえればといってもできない人達には、こちらから出向いて行けるようなシステムを作ってくのが必要と思う
		“こんな場合はここに連絡すると良い”というようなものがあっても良いと思う

員の活動を進めていきたい」「地域の協力のもと、住み慣れた場所で最期を迎えられるという成功例があれば、住民にも自分も同様の最期を送れるのではないかという気持ちになってもらえると思う」から〈住み慣れた場所で最期を迎えることを可能にする〉のサブカテゴリを抽出し、【住み慣れた場所で最期を迎えることの実現】のカテゴリが得られた。

「“集まる場所を提供する”という感じなら受け入れられると思う」「もっとサロン教室を増

やしながら、交流の場または話し合いの場を多く持っていけるかもしれない」等から〈人々の集まる場をつくる・増やす〉のサブカテゴリを抽出した。また「高齢になって共同で生活していく場面があればと思う」から〈共同生活の場の確保〉のサブカテゴリが得られた。これら2つのサブカテゴリから【交流の場の提供】のカテゴリを抽出した。

「町全体ではなく地区の問題として、地区で隣近所の方がちょっとお世話するというのが本当に必要ではないかと思う」「もうちょっと誰かが入り込んで手助けしてあげれば、高齢者は助かるのかなと思う」等から〈隣近所のちょっとした手助け・声かけ〉のサブカテゴリを抽出した。また「モデル事業として“日中は誰もかれもがみんなヘルパーさん”というような取り組みをしていただけたら嬉しく思う」等から〈モデル事業化（誰もがヘルパー）への取り組み〉のサブカテゴリを抽出した。「地域住民として、支援していくことは可能と考える」等から〈一住民としての支援〉のサブカテゴリを抽出した。これら3つのサブカテゴリから【地域住民としての些細な支援】のカテゴリを抽出した。

「行政としても、集落再建、合併・合流というようなことも避けられないのではないか」から〈集落再建〉のサブカテゴリ、「一住民としての高齢者への支援を地域住民に周知することは行政の役割となる」から〈住民への周知〉のサブカテゴリ、「住民だけでできなければ行政の出番が来るというようになっていけば良いのではないか」から〈支援不足の補い〉のサブカテゴリが得られた。これら3つのサブカテゴリから【行政の役割】のカテゴリが抽出された。

「地域の支援ではどれだけ一人の人に大勢の方が関われるかというところが、最終的には重要になると思う」から〈その人にあわせたネットワークづくり〉のサブカテゴリが得られた。「声をかけてもらえればといってもできない人達には、こちらから出向いて行けるようなシステムを作っていくのが必要と思う」等から〈地域の現状にあわせたシステムづくり〉のサブカテゴリが抽出された。これら2つのサブカテゴリから【地域特性を考慮した支援ネットワークづくり】のカテゴリが抽出された。

Ⅵ. 考察

1. 過疎山間地域における高齢者支援ネットワークの現状

A町における高齢者支援ネットワークの現状として、表1の〈一住民として高齢者の生活を支える〉〈民間団体による支援がある〉〈行政の声かけで住民の集う場をつくる〉〈行政の条件付の見守りがある〉等から、住民・民間支援団体・行政、それぞれの立場でひとり暮らし・夫婦世帯高齢者の地域での生活を支援していることが明らかになった。また表1の【ここにはコミュニティが存在する】〈近隣との繋がりがある〉〈一住民として高齢者の生活を支える〉から、特にA町では近隣住民の繋がりがあり、共に生活するという昔ながらのコミュニティが存在していた。そして〈近隣住民が“役に立ちたい”という思いをもっている〉より住民は“役に立ちたい”という思いを持ち高齢者の生活を実際に支えており、高齢者を取り巻く近隣住民の支援ネットワークが活きていた。また一方で、それぞれの立場での支援の限界も浮き彫りになった。

地域の支援者は、【高齢者は“ここに生き、住み続けたい”と思っている】と理解していた。佐々木らの山間豪雪地のひとり暮らし・高齢者のみ世帯を対象とした研究[18]においても約8割が今の生活を継続したい思いを持っており、A町の高齢者も多くは同様の思いを持っていることが推察され、地域の支援者は高齢者の“ここに生き、住み続けたい”思いを理解し、その思いを大事にしていた。また、高齢者が寂しい思いや金銭の負担を感じていること、高齢者によって考え方が異なり生活意欲が減退することもあること、トラブルへの不安があることなど、高齢者が生活に対してマイナス感情を抱いていることも感じていた。このように高齢者の“ここに生き、住み続けたい”思いを大事にしつつ、

高齢者の様々な生活に対するマイナス感情も捉えながら関わることが高齢者支援に繋がっていると考えられる。また地域の支援者は〈住民数の減少〉〈地区の点在〉〈高齢者だけの地区での限界がある〉といった【過疎化が進んでいる】地区の現状や、【高齢者は周りの手助けがあれば独居維持が可能である】といった高齢者の生活状況をよく把握しており、その上で必要な支援を行っていた。地域の状況・高齢者の生活状況を把握すること、またそれを支援者同士で共有することは、支援課題を共有することに繋がり、支援ネットワークを構築する上で非常に重要であると考える。

高齢者支援の具体的な方法として【様々な住民が集う場がある】のカテゴリが抽出された。その内容を見ると、地域の行事、住民の自発的な茶話会、保健師が行う保健指導の場の利用や地区組織活動の場、行政主催のサロン教室など、様々な立場で高齢者を含めた住民が集う場をつくっている。地域住民に焦点を当ててみると、住民自らまたは行政と協力して集まる場をつくっている。このように住民が集う場が数多くあることにより近隣との交流や繋がりが保たれ、そのことが日常的な交流・見守りに繋がっていると考えられる。また【支援者は“住民が集う意味”を感じている】の内容として、高齢者が楽しみにしていること、健康に繋がっていることを実感していた。齋藤ら[19]は『お茶飲み』は高齢者にとって『楽しみ』『ストレス発散』『生活のはり』等になっており、『お茶のみ』により高齢者に情緒的サポートが提供されていると述べている。A町での様々な住民が集う場においても高齢者はお茶を飲みながら友人や近隣住民と自由に話をすることができ、高齢者にとって『お茶飲み』と同様の意味・効果をもたらしていると考えられ、精神的・社会的な健康に繋がっていると考えられる。

【様々な住民が集う場がある】以外のそれぞれの立場での支援としては、住民では、独居の認知症高齢者の生活を協力して支えたり、電気・水道などの不具合の手配や生活上の困難の手助けなど、高齢者の生活そのものを支援していた。このことから、住民同士の日常的な交流・見守りがあり、生活上の支え合いが行われていること、また家族に近い立場で近隣住民同士が繋がっていることが窺えた。このような生活上の支え合いは精神的な支え合いにも繋がると考えられる。また民間団体は出張診療所や公的制度を利用した生活支援、行政では2日に1回などの条件付ではあるが、地域で高齢者を見守る役割をつくることを行っていた。支援の限界として民間団体では、制度を利用しての生活支援をしているがやはり〈民間団体は家族の代わりはできない〉こと、行政では24時間生活支援するのが困難であること、生活を補う為の制度の利用者が少ないことが挙げられた。これらの支援の限界については、前述の状況から全てではないが家族に近い立場である近隣住民がかなり補っていると考えられる。このようにA町では住民が“役に立ちたい”思いを持ち、高齢者の生活支援の重要な役割を担っているが、その一方で〈住民の負担・責任が大きい〉と【住民同士の支え合いの限界がある】という現状もあると考えられる。

今回家族の立場での支援者はいなかったが、地域の支援者が捉えた別居家族の対応として、【家族が高齢者の意に反して連れて行く】という現状があった。家族の様々な事情が推察されるが、それでも尚かつ高齢者が住み慣れた地域で最期まで住み続ける為には、やはり家族の理解や支援が必要である。具体的には、高齢者自身の“ここに住み続けたい”思いや周りの手助けがあれば独居維持が可能である高齢者の状況の理解、また別居家族等の支援体制は独居の日常生活を支える条件の一つであることから[20]高齢者の生活に関する実際の支援が必要であると考える。

以上のようにA町では、ひとり暮らし・夫婦世帯高齢者を取り巻く近隣住民を支援ネットワークの核としながら、民間団体・行政はそれぞれの立場で住民と共に高齢者を支えるという支援ネットワークを形成していた。しかし、病

気や要介護状態になった場合や過疎化の進行による住民相互の支え合いの低下によって、住み慣れた地域での生活の継続が困難になる為、A町の現在の保たれているコミュニティ力を活かした高齢者支援の検討が必要であると考えられた。

2. 過疎山間地域における高齢者支援ネットワークの課題

A町における高齢者支援ネットワークの現状を踏まえて、A町のひとり暮らし・夫婦世帯高齢者に焦点を当てた支援ネットワークの課題を検討すると、まず1つ目に【交流の場の提供】が挙げられる。具体的には〈人々の集まる場をつくる・増やす〉や〈共同生活の場の確保〉である。多くの高齢者は"自分の家がよい"と言っており、また皆で集まって話をすることを楽しみにしている。高齢者にとっては自宅で自分のペースで生活しながら、気兼ねすることなく自分が話をしたい時に仲間と会えることが望ましい。自宅で生活しながら気ままに仲間と話したり趣味の活動をする場を提供することができれば、高齢者の生活の質も維持できるのではないかと考える。また先に述べたとおり、住民が集まる場が多くあることは高齢者にとっては精神的・社会的な健康維持に繋がると共に、住民同士の繋がりの維持や高齢者の見守りにも繋がる。現在も住民・住民組織・民間団体・行政のそれぞれの立場で交流の場を提供しているが、回数を更に増やす、新たにつくるといった取り組みが必要である。〈共同生活の場の確保〉については既に実施している地区もあるが、実施に向けた課題として空き家や責任者･まとめ役、送迎などの問題が表出している。これらについては住民と行政が一体となり問題一つ一つに対して、住民ができること、行政ができることを明らかにしながら解決していくことが重要であると考える。

2つ目に【地域住民としての些細な支援】が挙げられる。これは〈隣近所のちょっとした手助け・声かけ〉であり、これにより高齢者が助かるのでは、独居が可能となるのでは、と地域の支援者は考えている。実際地域には、ひとり暮らし高齢者のゴミ出しや電球の交換、ちょっとした外出の付き添いなど公的サービスでは対応しにくいニーズや地域に生活している人にしか見えない地域の生活課題が存在している[21]。このようなニーズに対し、交流会での発言にもあるように、町全体というよりもむしろより身近な地区の問題として近隣住民がちょっとお世話をすることが求められるであろう。また交流会では、モデル事業として"日中は誰もかれもがみんなヘルパーさん"という取り組みを社会福祉協議会等で行って欲しいという意見も出された。これは具体的には、住民一人一人が隣近所のちょっとした支援をするという意識をもちそれを実行するということ、そして実行するにあたり生活支援に関する知識を社会福祉協議会等の支援を得ながら学んでおくことであり、このことが交流会でも出されていた、少しの手助けがあればこの先も在宅生活が継続できそうな独居高齢者等が住み慣れた場で最期を迎えられることに繋がっていくと考える。

【行政の課題】としては〈集落再建〉や一住民として近隣の高齢者を支援していくことの必要性を啓蒙する〈住民への周知〉が挙げられる。これは住民が主体的に高齢者への支援ができるための基盤づくりである。また行政は住民だけではできないことを担っていく役割がある。実際に住民が〈住民の負担・責任が大きい〉と感じている実態もあるため、住民の力を引き出しつつ、住民の負担やできない部分を具体的に把握し、高齢者への支援を補っていくことが必要であると考える。

今回ひとり暮らし・夫婦世帯高齢者に焦点を当てた高齢者支援ネットワークの課題として【住み慣れた場所で最期を迎えることの実現】が抽出された。まさにひとり暮らし・夫婦世帯高齢者支援の最終的な目標である。この目標を支援に関わる者が共有しこの目標達成の為に【地域特性を考慮した支援ネットワークづくり】をすることが重要である。【地域特性を考

慮した支援ネットワークづくり】とは、例えば高齢者だけの地区であるというその〈地域の現状にあわせたシステムづくり〉や様々な背景をもつ個別性のある高齢者個人の〈その人にあわせたネットワークづくり〉である。とりわけA町では、昔ながらのコミュニティが息づいているその良さを活かした支援ネットワーク構築の実現が可能ではないかと考えられる。そのためには住民の主体性を大事にしつつ、住民・住民組織・民間支援団体・行政が各々の立場でできること・できないことをお互いに確認し、個々バラバラでなくネットワークを形成しながら、協働していくことが重要であることが示唆された。

3. 本研究の限界と課題

本研究は14名を対象とした約1時間のディスカッションの内容を分析したものであり、対象者が思いを十分に語り尽くせなかった可能性がある。また本研究は過疎山間地域という特徴をもつ一市町村におけるひとり暮らし・夫婦世帯高齢者に焦点を当てた高齢者支援ネットワークの現状と課題であり、今後は同じような特徴を持つ地域での研究結果の積み重ねと共に、地域特性を明確にするため都市部との比較・検討が必要である。

Ⅶ. 結論

1. 過疎山間地域の地区特性と高齢者支援ネットワークの現状として、【過疎化が進んでいる】【高齢者は生活に対するマイナスの感情を抱くことがある】【高齢者は“ここに生き、住み続けたい”と思っている】【高齢者は周りの手助けがあれば独居維持が可能である】【家族が高齢者の意に反して連れて行く】【様々な住民が集う場がある】【支援者は“住民が集う意味”を感じている】【ここにはコミュニティが存在する】【様々な背景をもつ高齢者には共同生活への課題がある】【民間団体の支援だけでは限界がある】【行政の支援だけでは限界がある】【住民同士の支え合いの限界がある】の12カテゴリが抽出された。
2. 過疎山間地域におけるひとり暮らし・夫婦世帯高齢者に焦点をあてた高齢者支援ネットワークの課題として、【住み慣れた場所で最期を迎えることの実現】【交流の場の提供】【地域住民としての些細な支援】【行政の役割】【地域特性を考慮した支援ネットワークづくり】の5カテゴリが抽出された。
3. ひとり暮らし・夫婦世帯高齢者支援の最終的な目標である【住み慣れた場所で最期を迎えることの実現】の為に【地域特性を考慮した支援ネットワークづくり】が重要であり、様々な背景をもつ個別性のある高齢者個人の〈その人にあわせたネットワークづくり〉と〈地域の現状にあわせたシステムづくり〉の必要性が示唆された。

謝辞

本研究実施にあたりご協力くださいました交流会参加者の皆様、並びにA町関係職員の皆様に深く感謝申し上げます。

尚、本研究は平成19年度山梨県立大学地域研究交流センター・プロジェクト研究の助成を受けて実施した研究の一部である。

引用・参考文献

1) 厚生統計協会：国民衛生の動向・厚生の指標臨時増刊号，第54巻第9号，36-37，2007.
2) 前掲書1）38-39.
3) 佐々木美佐子，小林恵子，平澤則子ほか：山間豪雪地における高齢者の生活構造とソーシャル・サポート・ニーズに関する研究，平成14年新潟県立看護大学看護研究交流センター事業活動・事業報告書，9-16，2002.
4) 佐々木美佐子，小林恵子，平澤則子ほか：豪雪地における高齢者の生活構造とソーシャル・サポート・システム構築に関する研究，平成16年新潟県立看護大学看護研究交流センター年報，11-15，2005.
5) 前掲所1）224-230.
6) 内閣府：平成20年版高齢社会白書，46-47，2008.
7) 社会保険実務研究所：地域における「新たな支え合い」を求めて―住民と行政の協働による新しい福祉―，週刊保健衛生ニュース，第1458-1号，18-55，2008.
8) 前掲書7）18-55.
9) 色平哲郎，山岡淳一郎：実践コミュニティ再生講座第21回　日本のコミュニティ再生を考える―地域と医療の現場から―，月間福祉，91（4），64-69，2008.
10) 前掲書7）18-55.
11) ネットワークをどうつくるのか―東京都調布市の実践，介護保険情報，95，44-47，2008.
12) 渡邊由美子：高齢者の活躍で「安らぎと安心に満ちた支え合う暮らし」をつくる，保健師ジャーナル，63（8），678-682，2007.
13) 小林恵子，平澤則子，飯吉令枝ほか：農村地域に暮らす高齢者の生活ニーズとソーシャル・サポートの検討　サービス提供者のフォーカス・グループ・インタビューから，保健師ジャーナル，64（3），258-263，2008.
14) 反町誠，小野興子，横山貴美子ほか：少子高齢化時代の地域ネットワーク：多参画社会の構築と人材育成Ⅱ，山梨県立大学地域研究交流センター2006年度研究報告書，72，2007.
15) 山梨県早川町役場総務課：早川町50周年記念要覧，2006.
16) 山梨県早川町役場企画振興課：町制施行40周年記念要覧，1996.
17) 山梨県長寿社会課：平成19年度高齢者福祉基礎調査概要，1-16，2007.
18) 前掲書4）11-15.
19) 齋藤美華，小林淳子，服部ユカリ：前期高齢者の「お茶飲み」がソーシャル・サポートと主観的幸福感および交流の充実感に及ぼす影響，日本地域看護学会誌，7（2），41-47，2005.
20) 大野絢子，矢島まさえ，深川ゆかりほか：一人暮らし老人の日常生活を支える条件――一人暮らしの動機別比較―，日本地域看護学会誌，1（1），85-89，1999.
21) 前掲書7）18-55.

Current Situation and Issues of Elderly Support Network in a Underpopulated Mountain Region.

— Analysis of a Work Shop for Elderly Support Groups in A-town —

GO Yoko, MURAMATSU Terumi, SASUGA Yuriko,
KOYAMA Takami, KOHNO Yoshino, RINSHO Kenji, ONO Kyoko,
YOKOYAMA Kimiko, ITO Kenji, KIDO Yuko, HAKII Noboru

Key words : Underpopulated mountain region, elderly, living alone, couple households, support network